

窓から射し込む朝日の暖かさと眩しさに包まれて、私は目覚める。

まだわずかに糊の匂いが残る白いシートから身を起こすと、誕生したばかりの陽の光が身体に染み込んでいく。

ベッドを出て窓を開くと、途端に新鮮な朝の空気と心地よい冷気が流れ込み、部屋に充ちる。私は微かな鳥の鳴き声を聞きながら部屋を出る。

食堂にも朝の雰囲気が満ちていた。

開かれた窓からは、その前に掛けられたレースのカーテンを僅かにたなびかす程の爽やかな風が吹き込んでおり、飾り気のないシャンデリアを灯す必要がないほどに、朝日が食堂を輝かせていた。

入口で足を止めた私は、一瞬の間だけであつたが、その光景に目を奪われる。

食堂は早朝の為かまだ無人であつた。

部屋の中央には、私が初めてこの屋敷に泊つた翌日に、雅美がエンプーサとともに痴態を繰り広げたテーブルが、どつしりと鎮座している。昨日までの私であれば、そのテーブルを見た瞬間に覚えたであろう感情も、何故か今日は感じられなかった。昨日を境として確かに、私の中の何かが変化していたのだ。

食堂には、朝に相応しい音も又、満ちていた。隣にある台所で、雅美が朝食の支度をしている時の音である。

クロワッサンが焼ける香りと、新鮮な紅茶の醸し出す匂いがそこから漂いだしていた。

私は、その香りに引かれるように台所に向かう。

私に背を向けて床に屈み込んでいる雅美が、オーブンの中から焼き立てのクロワッサンを取り出す。

「雅美」

私はその背中に声をかける。

彼女が振り返り、立上がった。私を見る視線が逸れ、わずかに下を向く。

「……おはようございます」

小声であった。

私は彼女に近づき、その細い肩を両手で抱く。

しかし、彼女の視線はまだ下を向いたままだった。多分、半ば無意識の行動なのだろう、手が、填めたオーブンの焼けた鉄板を掴む為の分厚い手袋を外す。

私はそんな彼女を見下ろす。

私が初めて雅美を見たのは、この屋敷の門の前であり、エンプーサを探しに出ていた時であった。その時の彼女は、少女と女性との中間点と言う、どの女性にも必ずある一時期、どこか不安定さを感じさせ、その不安定さ故に、男の内部に潜むある種の欲望を掻き立てずにはおかない、そういった時期にある娘だった。

しかし今の彼女は……

私は、何故かそのとき、蝶の姿を思う。

「綺麗になった……」

「えっ？」

彼女が、その私の思わず漏らしてしまった声に顔を上げた。視線が絡み合う。

「初めて合った時より、君は美しくなった」

雅美が再び視線を逸らす。しかしそれは先程とは違う感情によるものだった。

私は雅美の身体を引き寄せる。なんの抵抗もなく胸にその顔が触れた時、彼女が自分から私に身体を寄せてきた。

私は腕の中に抱きかかえた彼女の髪の毛の香りを嗅ぐ。微かに石鹸の香りがした。

「昨日は……」

私が話そうとしたとき、腕の中の身体が少し震えた。そしてその私の言葉を押え込もうかともでも言うように、彼女は腕に力を入れ、私の身体を強く抱いた。

台所の外から、朝に相応しい鳥の鳴き声が聞えてくる。

食堂に彰子が現れた時、彼女はテーブルに着いていた私に意外そうな視線を向けた。

「おはようございます……。お早いですのね」

私は、食堂の入口に立つ彼女に微笑みを向ける。

「ええ、今日は早起きをしたくなりました」

「それは良い事ですわ」

彰子も私に微笑みを返してくる。そのいつもと同じであるはずの微笑みに、私は翳りを感じ取る。それは、昨日までの私であったならば、気付かなかっただろう程に微かなものだった。そし

てそれは多分、宗方先生が亡くなってからずっと、そこにあつたものなのだろう。

私は椅子に座ったまま、テーブルに着こうとする彰子を見詰める。彼女が私の正面の椅子に座った時、問いかける。

「身体の方はどうですか？」

私のその言葉が、あまりに何気なく、そして普通の調子であつた為に彼女は一瞬、眉を顰め、その言葉の意味に気付いたとき、視線を逸らした。

「いやですわ……急にそんな事」

私は椅子から立ち上がり、彰子の傍らに歩み寄る。椅子に座ったままの彼女が私を見上げる中、彼女の頬に軽く手を触れる。

「大丈夫ですか？」

私の二度目の問いかけに、彰子が小声で答える。

「はい……。まだ少し痛みますけど……。もう大丈夫かと……」

「そうですか」

私は、彰子の頬に当たった手をそのままに、その唇に向かって顔を寄せていく。

彰子が口付の予感に瞳を閉じ、私は彼女に口付ける。手が肩に回り、その手は私の肩を抱しめた。

口付の後、わずかに潤んだ目を向ける彰子に、私は問う。

「昨日、あれから雅美は貴方の部屋に？」

彰子が一瞬視線を逸らし、躊躇の表情となるが、すぐに私の瞳に視線を戻す。

「ええ、来ましたわ、そして……」

「そして？」

私は重ねて問う。しかし今度は彰子の視線は逸れなかった。

「あのこに抱かれましたわ……。私」

「で？」

「感じました、とっても。気がおかしくなるぐらいに……。今もまだ疼くような感じが残っていますわ……」

私は、再び彰子の正面の椅子に戻る。

「朝食のようですね」

食事を盛った銀色のトレイを持って、雅美が台所から出てきた。

焼き立てのクロワッサン、新鮮なバターと煎れ立ての紅茶、そして何気のない朝の会話を楽しみながら、私はそれとは別の事を思い浮べていた。

それは、この屋敷での初めての夜に盗み見た彰子と雅美との秘めた行為であり、その翌朝の、この食堂のテーブルの上で雅美とエンプーサが繰り広げた行為であつた。そして、私の精液を貪

った彰子の姿……。

しかし、今の私にはあの時のような、熾烈とも言える情欲はない。私の内に潜んだ淫らな情欲を糧とする獣を、私は制御出来るようになりはじめたのだろうか？

そして私は更に思う。

あの初めての朝の出来事の後に、与えられた部屋で書いた文章を、あの似非宗教の経典にでも出てきそうなものの事を。そして私は今になって、あの文章の中で私が犯していた、根本的な間違いに気付く。

私は、表層的に交わっていた会話を唐突に切り、紅茶を飲み干したカップをテーブルの上に置いた。その時の決して大きくはない音に彰子と雅美が私を凝視する。

「彰子」——私は彼女から視線を外すことなく話す。「見せてくれないか、その疼いているところを」

彰子が雅美に視線を向ける。

「雅美……、貴方も見てくれる？」

雅美が手にもった紅茶のカップを置き、答える。

「ええ、見たいですわ、奥様」

彰子が立ち上がる。

着衣のままにテーブルに上がった彰子が、立て膝を付き、私を見下ろす。その顔は微笑んだままであつたが、その微笑みには既に欲情の色があつた。

「見て……」

彼女が低く囁き、そして服の裾をめくり上げる。白く、美しい太股の付根までを、私と雅美の視線に晒け出す彼女の下腹部には、下穿がなかった。

彰子が両手を、股間に咲く秘部の両端に当てる。

「今朝も、剃りましたのよ……、ここ」

その言葉通りに、彼女の下腹部は完全に無毛であつた。

私はその箇所を見詰める。うっすらと盛り上がる恥骨の丘につづく二枚の肉色の襞、そしてその襞の狭間から微かに覗く桜色をした繊細な部分。

彰子が股間に置いた手を左右に引く。

「ご覧になって……こんな色付いていますわ……、私のここ」

確かに彼女のその部分は脹れて赤く充血していた。しかし私の目には、それは欲情の色として映る。

それが真実である事を証明するように、彰子の肉襞が愛液のぬめりを光らせはじめた。

彰子が私の目を見詰め、秘部に当てた手をゆっくりと動かしはじめる。視線がすり付く色合

を帯びはじめる。

「触れて……、触って下さい……」

細く白い指先の桜色をした爪に愛液が流れる。

椅子から立ち上がった雅美が、私の前の床に膝をついた。

彼女の手が、私のスポンの上から陰茎を包み込むように触れてくる。

私は雅美のまさぐる手を股間を感じながら、テーブルの上の彰子の股間に向けて手を伸ばしていく。

彼女が脚を大きく開いて、私の指先を受け入れる。

跪いた雅美が、開いたチャックから取り出した陰茎を咥え、両手でその下の垂れ袋をさすりはじめた。

私は、テーブルの上の彰子の欲情に潤んだ目を見ながら、指で膣口を探り、そして差し入れていく。指に絡み付いてくる粘膜のぬめった手触りと、輪状の筋肉が蠢く感触が伝わってわつて来た。

雅美が亀頭の部分を唇で包み込み、そして舌先が尿道を探りはじめた。

私は、指の腹で彰子の内壁を擦り上げる。

雅美の舌が、張り詰めた陰茎の上をゆつくりとその感触を楽しむように這い回り、もどかしいような快樂が生じる。

テーブルの上の彰子が微かに息を乱し、身体を上下に振りはじめた。私はその彼女の動きとともに、膣に入れられる濡れた指と、テーブルの上で柔らかく歪む彼女の尻を見詰める。

手のひらに愛液がしたたる。

雅美が、私の太股を掴んで深くくわえ込んでくる。亀頭が口蓋でこすれ、唇が陰茎の付根を圧迫する。

私は、私の陰茎を味わうように瞳を閉じて奉仕をつづける彼女を見下ろし、彰子の生暖かい秘部の疼きを手に感じる。

私の内部で覚えのある感触が芽生え、身体の中に巣食う獣がゆつくりと頭を擡げていく。しかし私は、その感触が今までとは何処かが違うことを自覚していた。

私は彰子の秘部に深く差し入れている指を動かし、雅美の唇に腰を押し付ける。二人の女が顔を快樂に颯め、同時に低い声を上げたその瞬間、私は悟る。

私の中に存在する「獣」を制御する事は不可能な事だったのだ。そう、その獣とは他でもない、私自身なのだから。

私の心の内で今のこの瞬間まで分離していたものが重なり合い、そして融合し、私は、海と言う「楽園」を追放われた「人間」となる。食欲で、淫らで、そして「生」を思いのままに生き「生」を闊歩する、全ての生物達の帝王たる、「人間」に。

私は彰子の秘部から指を抜き出し、尻に回した両手で彼女を引き寄せる。

股間に雅美の舌と息遣いを感じながら、彰子の秘部に唇を寄せ、愛液の絡まる舌で肉色の壁を割る。舌尖を膣口に深く差し込み、温かく濡れた粘膜を味わいながら、舌をくねらせる。

雅美の顔が前後に揺れて陰茎から込み上げてくる快感が増した。私は愛液を絡めた舌で彰子の陰核に触れ、唇で押し下げる。尖りを見せているその先端がめくれ、内部の違った舌ざわりを感じる。私の両頬を彰子の太股が締め付けてくる。

私は前歯と舌で陰核を挟み込み、優しく噛む。激しくなった彰子の喘ぎの音が耳に届き、そして腰が細かく震えはじめる。

彰子が、手を自分の尻に回し、その狭間で息衝く後孔をまさぐる。

唇の下で陰核が固くなり、私は弾き上げるように舌を使い、それを強く吸い上げる。繰り返すうちに彼女が、溜めていたものを一気に吐き出すように息をつき、快樂の声を上げた。その瞬間、太股が私の顔を強く締め付け、そして緩んでいく。

彰子がテーブルに尻を落とし、軽く達した後の潤んだ瞳を私に向ける。私はその瞳を見詰め、そして昂ぶる欲情を、雅美の口内へと開放した。

雅美の口の動きが一瞬止り、そしてわずかな、ほんのわずかな躊躇の後、彼女の喉が鳴った。

射精の後の軽い脱力感の中で、私は全裸となった彰子と雅美を見詰める。

二人は私の目の前のテーブルに上り、立て膝になった身体を重ね合せている。どっしりとしたテーブルは二人の体重をしっかりと支え、軋みもしてはいない。

彰子が、先程私の精を吸った雅美の唇を吸い、そしてそこに付いた精液の残滓と、彼女の唾液を味わいながら、雅美の股間に手を差し入れていく。

彰子の手が雅美の尻の狭間で微妙に動きはじめ、その二つの箇所から欲情を引き出しにかかる。彰子が雅美の耳元に何か囁きかけると、雅美はテーブルの下から見詰める私に背を向け、太股を開く。

私は彰子によって蹴られる雅美の尻を真正面から見詰める。微かに鞭跡の残る彼女の白い尻房と、その狭間から覗く二つの窄まり。そしてそれを蹴りつづける彰子の白く細い指。

彰子が手の動きを少し大きくすると、半ば肉穴の中に埋まっている指先に、細い愛液の糸が絡み付く。

彰子が雅美に囁く。

「もつとあの人に見せてあげて、貴方のものを……」

雅美は躊躇する事なく、両手を後ろに回し、掴んだ尻房を左右に押し広げる。

振り返った雅美が私を見る。

「見て下さい……奥様にいじられて濡れる私のものを、私の淫らな二つのところを……。私を」

覧になって、そして心を昂ぶらせて……」

自分の手で、狭間の粘膜が張り詰めるほどに開いた雅美の尻の狭間で、彰子の手が二つの肉穴を廻りはじめた。

細い指が陰核に触れ、軽く押し付けるようにしてこね回す。そして同時に、もう片手の手の指は、窄まった膣穴の周辺と、細かい皺を浮き彫りにする後孔の周辺を焦らすように撫でる。廻られる繊細な肉壁は、快樂に蠢く二つの穴のその蠢きによって淫らに形を変える。

雅美が、喉の奥から快樂の喘ぎを上げ、上半身を淫らにくねらせはじめた。だがその尻は与えられる快樂に耐え、細かく震えながらも動こうとはしない。

彰子は、雅美の秘部が愛液を滲みだす様子を、私が見て取れるように、指先をその両端にかけて広げる。膣口が息遣いのままに、ゆっくりと動く様子が私の目を射る。

滲みだした雅美の愛液に濡れる彰子の指先が、後孔の表面を撫で上げ、そして浅く挿入される。後孔が盛り上がり、指をくわえ込むように窄まる。

私は、目前で揺れる雅美の尻に手を触れ、その豊かな丸みを撫ぜ回す。彼女がそのもどかしげな感触に息を弾ませる。

「叩いて、お尻。私のお尻叩いて下さい」

私が平手をその尻に叩きつけた時、彼女の股間に屈み込んでいた彰子が、雅美の秘部に舌を這わせはじめた。

「あっ！」

雅美の上げる声を聞きながら、私は何度もくり返し尻を打つ。

赤く腫れて熱を持ちだした尻の狭間から、その狭間を下から舐めつづけている彰子の舌が見える。

閉じ加減となった肉壁を左右に押し分けるように前後する彰子の舌は、時折二つの肉の窄まりの中に浅く入って、その内側を舐め、そしてはつきりと尖りを見せる陰核をくすぐる。

私の叩き付ける手の下で、雅美の尻肉が震える。

尻を打たれる苦痛と、秘部を舐められる快樂。その2つが生み出す昂ぶりの中で、雅美は強く自分の乳房を掴み、捻りつぶすかのように乳首をつまむ。

「お願い、もっと、もっと私を、もっと痛めつけて……、ああ、廻って、廻り尽くして」

私と彰子は、その声にすすり泣く調子が加わりはじめるまで彼女を焦らす。

雅美の膣口からしたり出す愛液が濃くなり、彼女の肉壁と彰子の舌を繋ぐ透明な糸が白く濁ったものに変化する。

「いや！ いや。もう、もう焦らさないで、お願い、おねがいっ」

雅美が泣き叫ぶような切羽詰まった声を上げたとき、彰子の歯が、彼女の繊細な肉壁に食い込んだ。

雅美が絶叫し、上半身をくねらせる。そして私は、今まで以上の力をこめて彼女の尻を打ち据える。

雅美が再び絶叫する。

彰子が、がくがくと振るえはじめた雅美の太股を押さえつけ、陰核に歯を立てる。私は更に強く雅美の尻を打つ。

食堂の中に雅美の快樂の喘ぎと苦痛の悲鳴が響き、それが繰り返されていく。

朝の光が満ちた食堂の中で、そのきらめくような光を全身に受け、テーブルの上で快樂の踊りを舞う雅美の身体が、一瞬、私の視線の中で一枚の印象派の絵のように浮び上がった。昔、自然の光景をキャンパスの中に定着しようと努力しつづけた画家達の求めたものがここにあった。

雅美の身体が大きくうねる。

テーブルの上で激しく身悶えする彼女の姿を見詰め、赤く染まったその尻に平手を打ち付けつづける私の中に、二度目の欲情が生じた。

雅美の身体が弓のように反り上り、深い絶頂を味わう者の叫びを上げる。

私は、その究極の一瞬の後に、深い息を吐き出しながら崩れようとする彼女の身体を受止め、抱き上げながらテーブルから下ろす。

雅美は荒い息を吐き、そして太股は、激しかった絶頂の余韻に痙攣を繰り返している。

まだ焦点の定まらない瞳を潤ませる彼女を椅子に座らせた時、背後から彰子の腕が背中を抱いた。

振り返ると、そこには欲情に滾った瞳があった。

「抱いて……」

彰子が私を求め、そして私は服を脱ぎはじめる。

朝日の中に全裸となって立つ彰子が、目の前の私を見詰める。

その視線が私の下腹部に下りていく。

勃起した陰茎を見詰める彰子の瞳が欲情の光をきらかせた。

「もうたくましくなっていますわ……。さつき出したばかりなのに……」

その声の語尾は掠れていた。

そうするのが当然であるように、彰子が私の前に跪き、そして差し伸べた両手で陰茎に触た。手がそそり立つ肉塊の固さと熱さを確かめるように、その上を這う。

「命じて……。命令してください……。あなた」

彰子が私を見上げる目には、哀願が込められている。

「宗方先生のように、ですか？」

「……いえ……。あなたの声で、あなたの声で命じて欲しい……」

「啞えろ。啞えて、男のものを楽しむお前の姿を見せろ」

私を見上げる目が、哀願から喜びにその表情を変えていく。

彰子が陰茎を唇に含む。

下腹部で揺れはじめた彼女の頭に手を触れ、流れるような髪の毛の手触りを楽しむと、彰子は、陰茎の下の垂れ袋を両手で撫ぜ、口の中に取り込んだ亀頭に舌を絡み付かせる。

張り詰めた粘膜に触れる彼女の舌の暖かなぬめり、そして垂れ袋から沸き上がってくるじわりとした快楽。

私の息が乱れはじめたとき、彰子が顔を上に向けた。そして私が、自分のその行為を見下ろしている事を確かめ、顔を引き、陰茎から唇を放す。

彼女は、自分の唾液と先端の窪みから滲み出した粘液とで濡れる陰茎を、手のひらで包み込むように握り、指の腹で尿道の敏感な箇所をこすりながら、垂れ袋の表面に舌を這わせる。細く白い指によって握られる勃起した陰茎が更に膨れ上り、その堅さを確かめるように彰子が、陰茎を握り締める。

滲み出した粘液が亀頭の先端で透明な粒となり、彰子の舌がその粒を舐めとる。

私が脚を開くと、その股間に下から顔を差し込むように身を屈めた彼女が、垂れ袋の裏側の細い溝を舐め、そしてその向こうの窄まりに舌が触れた。

尖らせた舌尖をねじ込むようにして、彼女は私の肛門を舐めはじめる。そうする間も彼女の手は、止まることなく握った陰茎を擦りつづけている。

彰子の細く白い指の間に、粘液が透明な糸を引く。

「さあ、もうテーブルに上がっておくれ」

ただ愛撫を受けつづけることに限界を感じた私が囁くと、彼女が上目使いに私を見上げる。

「さあ早く」

私が再度促したとき、ようやく彰子が私の陰茎から唇を放し、立ち上がってテーブルに尻を乗せた。

彰子が、両手を後ろに付いて脚を大きく開きながら、身体を後ろに逸らせる。

私が床に膝を付き、ちょうど目の前の位置にきた彼女の秘部を見たとき、背後で雅美が椅子から立ち上がった。

彰子が私の肩越しに雅美に視線を向ける。

「見ている……雅美ちゃん」

彰子はその姿勢のままに囁き、私の背後で雅美が肯いた。

彰子が太股の付根の腱が張り詰める程に大きく脚を広げる。

「見て……あなた」

欲情にたぎった声で私に囁いた彰子の秘部が濡れる。彼女は、その濡れた肉壁の左右に手を掛

け、内側の繊細な女肉をむき出しにする。

尿道口が横長の円となり、その下で愛液を滲ませつづける膣がわずかに口を開く。そしてその奥には、濃い桜色に充血した複雑な凹凸が、彼女の息遣いに同調して微かに震えていた。

彰子が囁く。

「ご覧になって……私の全てを。……みんな、みんな貴方のものですわ……」

私の見詰める彼女の膣の内部から愛液が滲みだす。私はそれを舌で絡め取るように、薄く繊細な造りをした褌を舌尖でめり上げ、陰核を吸い、筒状に丸めた舌尖を膣口に差し入れる。

「あぁっ……」

舌によって秘肉を押し分けられる快楽に、彰子が声をあげ、私の顔の左右で白い太股が震えた。

私は、肉穴の内側を十分に味わった後、尖った陰核を唇に挟み込み、舌でこね回すように刺激する。

彰子の息が乱れる。

膣口から漏れ出した愛液が、その下の狭い間隔を伝い落ちて後孔を濡らす。彰子が秘部を押し広げている手に力を入れ、その上端で寄り合わされる粘膜の狭間から、陰核がわずかにその先端を覗かせる。

「後ろを向いて……」

私が顔を上げて求めると、彰子がテーブルの上で身体を回し、正座する時のように脚を折って尻を向ける。尻が彼女の体重によって開き、その狭間の二つの部分が内側から盛り上がるようにして剥き出しになる。

私は彰子の背後からその尻に両手を這わし、更にその柔らかな二つの盛り上がりを左右に押し開く。

再び秘部に舌で触れ、愛液のぬめりを絡め取ったその舌を後孔に触れさせる。舌を押し付けるように動かすと、彰子がすすり泣く声を上げた。

私は、愛液に濡れる膣穴の左右に両手の親指を当て、その狭い窄まりを押し開く。赤く充血した筋肉が捲り上がって通常外気に触れる事のない粘膜が剥き出しになる。彰子が後孔を窄めると、同調して蠢いた膣口の奥から愛液が滲みだし、テーブルの表面に糸を引いてしたたり落ちる。

私は片手の親指で、伝った愛液と私の唾液とで濡れる彼女の後孔に触れる。

ゆっくりと指の腹で撫でてやると、そこはすぐに柔らかくほぐれ、そして淡く盛り上がった円となっていく。

私はその円の中心に、ゆっくりと親指を押し入れる。きつく窄まった内部の管が指を締めつけてくると、人差指を膣口に挿入する。

二つの部分に指を受け入れた彰子が堪らない風情の声を上げ、尻を蠢かして狭間の二つの肉穴に力を入れると、独立した生き物のように秘肉が私の指に絡み付いてきた。

私はその動きを楽しみ、更に指で二つの内壁を擦り上げる。薄い肉の壁を、前後に受け入れた二本の指でつままれたとき、彰子は短く鋭い声で鳴き、そして軽い絶頂に達した。

私が床に仰向けに横たわると、勃起した陰茎が天井に向けてそそりたった。

「さあ、おいで」

私が求めると、彰子が私に覆い被さってきた。

彼女は私の唇を吸ってから乳首を舐め、軽く歯をあてて私を刺激する。かすかに息を乱すと、彼女は私のそそり立つ陰茎を握りしめ、ひらいた太股で私の下腹部を跨いだ。

彰子の半開きとなった唇から舌先がのぞき、唇を舐める。手が、握りしめた陰茎の先端を愛液に濡れ光っている秘部に触れさせ、亀頭で円を描くようにそこに擦り付ける。

尿道の窪みに鋭角的な快感がはしり、粘液と愛液とが交じり合ったものが私と彼女の狭間を繋いだ。

彰子が手を添えた陰茎に向かって腰を下ろして行く。

私はそのときの彼女の表情を見詰めつづけ、その吐く熱い息を感じる。

完全に私をその内部に受け入れた彰子が、秘部を陰茎の付根に押し付け腰を回して、深く満足したような重い息を吐き出す。

そのまま彰子が、私の身体におおい被さって来る。乳房の先端で固く尖った乳首が私の胸板に触れ、そして乳房の柔らかな弾力そのままにひしゃげる。

彰子が、私の頬を両手ではさんで食べるように私の口を吸い上げながら、テーブルに付いた膝を支点にして腰を上下に振りはじめた。

彰子の膣壁によってこられる陰茎に、私は強い快楽を感じる。

彰子と私の接点から淫らな濡れた音が漏れはじめた。

私達の背後から、私たちが絡み合う様子を見詰めていた雅美が立ち上がる。

雅美は、床で絡まりあう私達の傍らに屈みこんで、粘液にまみれた私と彰子の接点を食入るように見詰める。

雅美が唇を舐め、その半開きとなった唇から忙しない息が漏れる。

雅美の、床に屈み込んでいる脚が大きく左右に開き、その無残なまでに開いた股間で濡れた秘部が剥き出しになった。

私と彰子の交わりを見詰めながら、雅美が肉褌をかき回すかのようにして、激しい自慰の行為をはじめた。

私はそんな彼女を見詰める。

視線がからみ合った。泣く寸前のように歪む彼女の快樂の表情、そして、訴えるように決して私の目から視線を外そうとはしないその瞳。

その瞳に一瞬苦痛の色が翳った。だがそれはすぐに快樂のきらめに転じた。

雅美は膣穴に差し入れた二本の指で、その内部をより激しく擦りあげる。

私と交わりながら上下する彰子の尻に、雅美が顔を近づけていく。

彰子が、雅美の舌を後孔に感じる。

「ああ！」

急激に増した快樂によって彰子が声を張り上げ、そして後孔を舐めはじめた雅美に向かって尻を突き出す。

雅美が、愛液に濡れ、挿入の度に盛り上がる後孔に舌を這わせながら、もう片方の手で、私の垂れ袋を撫でさする。

生じた快樂によって、陰茎が更に張り詰めた。

雅美の自慰の指に、秘部からしたたった愛液が糸を引く。

私は、私に覆い被さる彰子の背中に手を回して抱きしめ、そのまま私と彼女は身体の上下を入れ替える。

彰子の上になった私は、思いのままに腰を彼女の股間に向けて突きいれ、そして激しく振る。

背後では雅美が、陰茎の出し入れによって掻き出された愛液に濡れる彰子の後孔に指を挿入し、そしてその上の私の尻の狭間に舌を這わす。

私と彰子が、同時に快感のうめきを上げ、そして私は更に強く腰を振る。彰子が太股で、腰を挟みこみ、そして締め付けてくる。

快樂に身体をよじりつづける彰子が、両手で私の肩を掴んで、腰を上私の腰に向けて、押し上げ、振りはじめると。

私は、快樂に歪む彰子の顔を見詰め、彼女が譫言のように叫びつづける意味のない言葉を聞きながら、彼女の内股の奥に秘められた肉穴の中に陰茎を突き入れつづける。

彰子が、次第に身体の深いところからこみ上がってくる絶頂の大波に翻弄され、激しく身悶えする。

私の腕の中で、彰子がすすり泣く声を上げはじめる。激しく乱れる息とともに、固く閉じられた瞳から溢れ出した涙が頬に伝う。

絶頂の瞬間を迎えようとする彰子が、高く両脚を差し上げ、私の肩を掴む手が肌に爪を立てる。

私は彼女の身体に自分の身体を密着させ、そして射精の衝動に耐える。

私の身体に、全身を痙攣させるような彰子の身体の震えが伝わったとき、彼女は喉の奥から絞り出すような絶頂の声を張り上げた。

陰茎を深く受け入れている膣が、与えられなかった精液を渴望し震える。

私は、まだ快樂の震えを止めようとはしない彰子の身体を、引き剥がすようにして立ち上がり、そして雅美に命じる。

「鞭だ」

股間では、彰子の愛液に濡れた陰茎が固く勃起し、その先端からは透明の粘液が滲みだしていた。

鞭を持って立つ私の前に、床に跪いた二人の女が並んで尻を掲げる。

男の精を充分に吸い、成熟した彰子の尻、そして、まだ彼女と比較すると、わずかに幼さを残し、脂肪の層の薄さが目立つ雅美の尻。私はその二つの肉の盛り上がりを見詰め、そして鞭を振り上げる。

細く鋭い鞭は風を切り、彰子の尻に当る。

「ひっ！」

彰子が悲鳴を上げ、尻を震わす。私は、つづけて鞭を雅美の尻に向けて振る。

「あっ！」

雅美が欲情に滲ませた声を上げる。

私は、二つの尻に向けて鞭を振るいつづける。下腹部の陰茎が、私の昂ぶりを示すかのように張り詰める。

彰子と雅美の尻が朱に染まり、その表面に無数の赤い筋が刻まれた頃には、二人の女は悲鳴とそしてその裏に隠した欲情のあえぎを上げ、性的な興奮と苦痛、そして快樂によつて全身を熱く火照らせ、薄い汗をながしていた。

鞭がその汗を飛び散らせ、鞭跡から滲みだした薄い血が、その汗に混ざっていく。

二人の女は、床に這ったその身体を激しく悶えさせ、爪で床を搔き、股間を愛液で濡らす。

最初に哀願の声を張り上げたのは、やはり雅美であった。

「黽って、黽って、私のお尻。もっと打って、もっと痛めつけて、もっと傷つけて、私の淫らな身体」

雅美は、乳房が床でひしゃげる程に上半身を屈み込ませ、尻を突き出し、愛液に濡れ光るその狭間を私の目にさらけ出してみせる。

「ああ……、私のいやらしい穴はこんなに濡れています。罰して、ああ、もっと痛めつけて、こんなに、こんなに墮落した私を！」

私は雅美の、自ら開いた股間に向けて鞭を振り下ろす。細く鋭い鞭が、二つの肉穴を靸し上げて濡れた音を響かせ、敏感な秘部を打たれる苦痛に、彼女は甲高い悲鳴を張り上げる。

雅美が快樂と苦痛の涙を流しながら、両手を股間にやり、秘部の肉襞を自ら開く。

奥の繊細な粘膜に包まれた膣口が剥き出しになり、そして彼女は、尖った陰核までも包皮か

ら開放した。

私の振るう鞭が、彼女のその剥き出しの部分をつつ。

桜色の粘膜と肉穴に、赤いみみず腫れの跡が刻み込まれ、薄く滲みだした血が愛液と混ざり合う。

雅美の漏らす泣声が、すすり泣く声となり、その流れる涙と比例するかのようになり、彼女の膣口から滲みだす愛液は濃く、そして激しくなっていく。

雅美の横で、彼女の激しい喘ぎを聞いていた彰子が、その尻で隣の雅美を押しつけるようにして、太股を開き、彼女同様に欲情に滾った股間を突き出して見せる。

「ああ、私にも、私にも鞭を下さい」

「開け。雅美のようにお前の淫らな肉穴を剥き出しにしてみせろ」

彰子その言葉に従い、両手で秘部を搔き分けるようにして、柔らかな粘膜を剥き出しにする。

私は大きく振り上げた鞭を、その箇所に向けて振り下ろす。

激しい鞭の音と、彰子の張り上げた絶叫の叫びが食堂に響く。

私は腕のたるさも忘れたかのように、彰子と雅美に鞭を振るいつづける。

汗と愛液とそして血に汚れた鞭を、私は床に投げ捨てる。

三人の荒い息遣いの音と、二人の女が流した愛液と汗の匂いが充ちる中、私は熱く火照った雅美の尻を掴む。

張り詰めた亀頭の先端を、薄い血の混ざった愛液によって濡れそぼり、無数の鞭跡が走る秘部に当てる。

「ああ……」

雅美が、傷つけられた秘部を犯される期待と恐れにおののき、か細い声を上げた。

私はその声にも更に欲情を深め、昂ぶりのままに一気に陰茎を挿入する。

「!!」

雅美は全身を震わせ、床を爪で搔きながら、苦痛と快樂の悲鳴を上げた。

私は、汗に濡れ、時折痙攣するように震える彼女の尻を両手で鷲掴みにし、その中心点に突き入れた陰茎で、膣の内部をえぐるように腰を振る。

下腹部で雅美の尻がひしゃげ、私はその弾力と陰茎に感じる、引きつるような締め付けを楽しむ。

苦痛と快樂に泣きはじめた雅美が、股間から回した手で陰核をまさぐりはじめる。

激しく振る腰の動きと昂ぶる欲情によって、私は早くも射精の衝動を覚える。しかし、私は白濁を雅美に与えることなく、すばやく腰を引く。

「いやっ！ 抜いちゃだめ」

雅美が中断された快感に落胆の叫びを上げる。

私は、すぐ横で私を待ちわびる彰子の、尻の狭間に陰茎を押し付ける。秘部と後孔とのわずかな秘肉が、陰茎に押されて歪む。

その感触に彰子が哀願する。

「ああ……早く、早く下さい……。私のいやらしい肉の穴、痛めつけて……」

私は雅美の愛液と血で汚れた陰茎を彰子の膣穴に押し入れる。

彰子が喘ぐ。

私は彼女の、雅美とは微妙に違う膣の感触を味わい、そこから快樂を引き出し、そして陰茎を引き抜く。

私は再び雅美の尻に乗り、秘部の上で息衝く後孔に亀頭を当てる。

「ああ……」

雅美が期待に声を漏らす。そして彼女は自分から腰を突き出し、陰茎を後孔に受け入れていく。

「入ってくる、入ってくるわ……」

雅美が喘ぎ、その声と表情を見詰めている彰子が、こらえ切れずに哀願する。

「早く、早く私にも……」

私が、数度腰を振り雅美の尻を味わってから、陰茎を引き出しにかかると、彼女は精一杯に後孔を窄め、陰茎を引き止めようとする。

「いやっ、お願い、お願い……」

私は、彰子の後孔に陰茎を当てる。

彰子が、まだ陰具によって裂かれた傷が治り切っていない後孔を思い、喘ぐ。

「いいか？」

私が亀頭を押し付けながら問うと、彰子は声にならない肯きで返事を返す。

陰茎が輪状の筋肉を押し開くようにして、挿入されていく。

彰子は手を握り締めながら、その挿入に耐え、自分の身体が私によって完全に支配され、肉体に与えられる快樂も、苦痛も、そして精神さえもが全て男の所有物になった事を自覚し、大きく、激しい声を上げる。

「強く、強く私を、もっと激しく私を！」

彰子が傷ついた後孔で陰茎を強く締め上げ、そして腰を自ら前後に振りはじめ。

血が、秘部の粘膜に滲む血よりももっと濃い血が、太股に紅い線を引く。

私の中で射精の衝動が昂ぶる。

私は、その衝動の波に耐え切れなくなる寸前まで、彼女の尻を犯し、そして陰茎を抜く。

びくびくと震える陰茎の付け根に沸き上がっていた射精の波が引いたとき、私は再び雅美の後孔に陰茎を与える。

私の下腹部に押されて弾む尻肉の狭間に、雅美の手が伸びて、肉襞を押し上げている陰核をつまみあげた。

絶頂を待ち切れない彼女は、私が深く後孔を貫くのにあわせるように、指の間で陰核を刺激する。

雅美の上げる声が急速に切羽詰まったものに変化していく。

彼女の指が強く陰核を押しつぶしたとき、激しく窄まった後孔が陰茎を食いちぎるほど強く締めつけてきた。

雅美は尻の快樂と、自慰の快樂とによって絶頂を迎える。その瞬間、私の見下ろす彼女の背中が、背骨の形を浮び上がらせる程によじれる。

雅美がゆつくりと床に崩れ落ちた。

その横で彰子が尻をもたげ、私に振り返る。

「ください……」

私は彼女の尻を掴む。

「ああ……」

二度目の後孔への挿入に、彼女は唇を噛み閉めて耐え、そして私を楽しませる為はその傷ついた肉穴を窄めてみせる。

私は彰子の大きく広がった尻の狭間に、深く下腹部を押し付け、そして彼女の奥深い個所を味わう。

彰子が自分から尻を振りはじめる。

快樂が、豊かな肉の狭間で陰茎を締めつけられる快樂が生じた。

「欲しい……」

尻をゆつくりと振る彰子が、私に囁く。そして私もそんな彼女の動きに合せ、腰を振りはじめる。

彰子の吐く、細く忙しない息遣いが私の動きに同調し、豊かさを感じさせる尻肉の狭間で陰茎が前後する。

私は押えつけていた強い射精の衝動から枷を外し、激しい衝動のままに動きはじめる。

「あつ、あつ、あつ、もうすぐですわ、いきますわっ」

彰子の息の中に、切羽詰った声が混じりだす。

私は腰を振りつづける。

そして彰子が遂に絶頂の声を絞り出したとき、私も同時に彼女の中に射精の衝動を開放する。その瞬間、彼女は腹の奥底にほとばしり散った熱い飛沫を感じ、激しい絶頂の喜びに達する。

床に横たわる雅美の身体の上に、彰子が身体を重ねていく。

翌日

私は雅美の見送りを受け、勤務先の大学に向かう為に、彰子とともに屋敷を出る。

屋敷の玄関で私は、夏の太陽のような刺々しさが無い日光を全身に受け、そして空を仰ぎ見る。見事に晴上がった初秋の空がそこにあった。

私と彰子は肩を並べるようにして、屋敷の門に向かって歩く。

隣の彰子に話しかける。

「五日ぶりですね、屋敷を出るのは」

「そうですね……。まだお会いしてから五日しか経ってないのですね……」

「もっと長い時間が経ったようにお思いですか？」

「ええ……。そう思えますわ」

私は彰子に視線を向ける。そして私は彼女の清楚な横顔を見詰めながら、この五日間を回想する。

暫しの間、私達は無言で歩みつづけ、屋敷の門をくぐる。

私は唐突に彰子に問う。

「あの最初の夜、私が、母屋のあの部屋での貴方と雅美の行いを見ていた事に気付かれていますか？」

彰子が一瞬沈黙し、そして答える。

「ええ、存じていましたわ……」

「でも、もしその事がなかったとしても……」

彰子が私の言葉を継ぐ。

「ええ、同じでしたでしょうね」

「……怖い方ですね、宗方先生は……」

彰子が無言で肯く。

私はふと背後を振り返り、屋敷に顔を向ける。やはりその屋敷は私の心の内にあるそのままの姿で、私の目に写る。

そのとき私は、ある事に思い当った。

「エンプーサはどうしました？ 昨日は見ませんでしたか……」

「エンプーサ？　そうですね、そう言えば見ませんでしたわね……」

そして私は、その彰子の言葉を聞きながら、何故か、これから先もう二度とあの黒猫の姿を見ることがないだろうと思った。

私は再び、背後の屋敷に目を向ける。玄関に佇んだ雅美の姿が見える。

彼女は微笑みを浮かべていた。